

自然と実践

上 廣 榮 治

日の出の時間が早まるにつれて日差しも強まり、春の光を感じる季節です。

旧暦二月を「如月」と呼びますが、調べてみると、諸説ある由来の一つに、草木が芽生えはじめることを意味する「生更木」がありました。その字面からは、厳しい寒さにじっと耐え、春の日差しとともに芽を出す植物の姿が想像されます。

また、暦の二十四節気の一つに「啓蟄」があり、今年は三月六日その日に当たります。「啓」は「ひらく」、「蟄」は「土の中で冬ごもりしている虫」の意味で、「啓蟄」は、冬眠していた虫が春の訪れを感じて、穴から出てくる頃ということなのです。

いずれも、自然に寄り添い、自然とともに生きていた古人の感性を思わせる言葉です。では、現代人の自然に対する感受性ははどうでしょう。

昨年発表された、国立青少年教育振興機構が全国の小中高生約一人を対象にした調査によると、「高い山に登ったことがない」生徒がおよそ五三パーセントと半数以上。「大きな木に登ったことがない」生

徒は三七パーセント。そして、「太陽が昇るところや沈むところを見たことがない」生徒は三二パーセントで、およそ三分の一もいたというのですから驚きます。以下、「貝を採ったり、魚を釣ったことがない」が二五パーセント、「野鳥を見たり、野鳥の声を聞いたことがない」が二一パーセント、「昆虫をつかまえたことがない」は二〇パーセント、「夜空いっぱい輝く星を見たことがない」は一七パーセントなどとなっており、現代っ子たちの自然体験の貧しさがうかがえます。

その一方で、テレビゲームやコンピュータゲームをしたことのない生徒はわずか二二パーセントしかおりません。現代の子どもたちが実体験から遠ざかり、代わりにテレビやコンピュータなどによる疑似体験に馴染んでいることがよくわかります。

かつて、子どもたちは外で遊ぶことで、豊かな自然体験や社会体験をしていました。また、家庭の中でも子どもなりに家事を分担し、生活体験を積んでいました。これらはすべて実際の生の体験です。そうした実体験を通して、子どもたちは成功したり失敗したりして、いろいろなことを学んでいました。実体験で得た達成感が生きる自信につながっていき、実体験での感動が感性を豊かにしました。

しかし、社会が高度化し、生活が便利になるにしたがって、自然と人の関係も、人と人との関係も希薄になっていきました。かつては外で集団で遊んでいた子どもたちは、テレビやパソコンの画面の中で一人遊びをするようになりました。今では街で子どもの姿を見かけることが、めっきり少なくなりました。

もちろん、早起きして日の出を見に行かなくても、寒い冬の夜空の星を見なくても、高い山に登らなくても、林の中でカブトムシを探さなくても、居ながらにして、それがどんなものかを知ったり、体験したつもりになれる時代になりました。

例えばインターネットで「日の出」を検索すれば、たちまち各地の日の出が見られます。星が見たければ、日中でもプラネタリウムやコンピュータグラフィックスが臨場感あふれる夜空を再現してくれます。高い山に登りたければ、テレビの「にっぽん百名山」などの番組で、ベテランガイドが案内してくれます。カブトムシが欲しければデパートで買ってくればいいのです。野鳥の鳴き声を知りたければ、電子辞書に鳥の名前を入力するだけで、瞬時に、その鳴き声はわかります。

しかし、そうした疑似体験は、単なる知識として身につくだけです。身体全体で感じることはできません。例えば、映像で見る日の出はただの視覚的な風景ですが、実際に日の出を見れば、視覚だけでなく五感のすべてがはたらいで、「ご来光を拝む」としか表現できないような感動に包まれます。日の出は単に太陽が地平線から昇る現象ではなく、世界のすべての営みの一日の始まりであることを実感させてくれるのです。

野鳥の声も、虫の音ねも、実際に聞けば、鳴いている場所や時間、季節や天候など、環境によってそれぞれ違って聞えます。疑似体験はどこまでいっても疑似的な体験であり、それから得られるものは観念的な知識でしかなく、豊かな感性を育むものではないのです。感性を育み、生きる力を鍛えてくれるのは、あくまで直接的な生の体験なのです。

私が、実体験が少なくなったことを愁うれうのは、自然体験が少なくなれば、大自然への畏敬いけいの念が薄れるからです。社会体験が少なくなれば、社会の恩を忘れるからです。生活体験が少なくなれば、家庭愛和の気持ちを育むことができないからです。つまり、実体験の中でこそ、自然の恵みを実感し、「三つの恩」に気付くのです。三つの恩だけではありません。実体験が大切なのは、実体験の中でこそ、人は真に感動

することが出来るからです。実体験の中でこそ、人知を超えた存在に感動し、人の勇気ややさしさに感動し、心と心が共鳴して感動するのです。そして、この感動こそが人間力を育み、倫理力を醸成じょうせいするのです。逆にいえば、実体験の機会が乏しくなつて、人と人とのつながりが希薄になれば、倫理社会はそれだけ遠退とのおいていくということです。

このことは単なる理屈ではありません。先の調査でも、すべての学年を通じて、自然体験や生活体験の少ない生徒ほど、「道徳観や正義感」が弱いという結果が出ています。

それなのに、子どもたちはますます孤立し、自分の世界に閉じ籠もろうとしているから心配なのです。父親の転勤で転校した学校にうまく馴染めず、引きこもりがちな小学生の孫に、せめて自然と仲良くなつてもらいたいと奮闘している知人がいます。この一年、祖父と孫は、小さな畑で汗を流しました。春には植物園の学芸員が案内する森のガイドウォークに参加しました。夏休みには磯の生物観察会や山登り。秋には収穫したサツマイモで焼き芋をして、冬には天体観測やドングリ拾いをしたそうです。おかげで孫はほとんど元気に逞しくなつていきました。虫を怖がついていた弱虫が昆虫大好き少年になり、草花や生き物にやさしくなりました。

「自然の力つてすごい。たった一年でジイさんより逞しくなつた」と知人はうれしそうです。

しかし、元気になつたのはお孫さんだけではなく、知人もそうでした。人は自然の中でこそ活性化されるのです。自然の中での体験は、自分もまた自然の一部であると感じるひとときです。自然と一つになつたとき、私たちの「気付き」の感性はおのずと磨かれ、鋭くなつていきます。そして、その「気付き」こそ倫理実践の出発点なのです。